

斗 南 藩



斗南藩 ゆかりの史跡

⑥ 斗南藩士 じょうりくち 上陸の地



明治3年、新潟から海路をたどって藩士達が上陸した地のひとつが大湊大平浦（現大湊新町）です。石碑は会津鶴ヶ城の石垣に使用されている慶山石を用い、会津若松市を望む方角に設置されています。碑文の揮ごうは会津松平家第13代当主松平保定氏によるものです。



⑦ 斗南藩史跡地

斗南藩が計画、整備した斗南ヶ丘市街地の一角です。昭和11年10月の秩父宮両殿下の下北御巡遊の際、

この地を訪れたことを記念し、昭和18年7月、会津相携会（現斗南會津会）がゆかりの地斗南ヶ丘に記念碑を建立。付近には、斗南藩士移住当時の井戸や土堀跡などがあります。



④ 柴五郎一家 居住跡・顕彰碑

柴五郎とその一家が、明治4年から間借り住まいしていた所です。付近には、柴五郎の兄、五三郎が仮住まいしていた香香稲荷神社があり、その奥に市内の有志が斗南藩移住150年を記念して建立した顕彰碑があります。



② 招魂碑

明治33年8月、円通寺の境内に会津藩士の招魂碑が建てられました。碑面は、斗南藩主松平容大公の揮ごうで、碑文は会津藩士族南摩綱紀博士の撰によります。



① 徳玄寺

容大公の食事や遊びの際に利用されたり、また斗南藩重臣の会議場ともなったお寺です。



③ 円通寺

斗南藩の仮館として藩庁が置かれ、斗南藩校日新館が開かれた場所。容保、容大両公が起居を共にしており、容大公愛玩の布袋像などが保存されています。



東通村尻屋地区

⑧ 感恩碑

昭和11年10月21日の秩父宮両殿下のご巡遊を記念し、尻屋地区の有志が建立。



⑨ 尻屋崎灯台

尻屋岬周辺の海域は、航海の難所として恐れられていました。尻屋崎灯台は、明治4年に斗南藩の設置運動により同6年に起工し、同9年に竣工されたもので、我が国最古の洋式灯台のひとつです。



尻屋漁港方面へ向かうと墓地が見え、その横道へ入り、グラウンド脇のバックネット脇の道を進むとあります。



斗南藩の誕生

会津藩は、表高 23 万石を誇り、独自の伝統文化に華を咲かせていた。また、尾張・紀伊・水戸の徳川御三家に次ぐ家柄で、葵の紋を許された奥羽の雄藩でした。嘉永 6 年 (1853) 6 月 3 日に浦賀へペリーが来航した前年に、会津藩では藩主が松平容保 (かたもり) 公が九代藩主を継ぎます。

ペリー来航を契機に国内では世情騒然となり、佐幕派と倒幕派が対立する中、文久 2 年 (1862) 8 月、容保公は幕府の命を拝し、京都の治安維持のため京都守護職に就任する。同 12 月容保公は上洛し、会津藩兵千余人を率いて攘夷運動が激化し、無法地帯と化した京都で治安維持に努め、孝明天皇はもとより一般庶民からも厚い信頼を受けていました。公武合体の第一線に立つて職務を全うしたものの慶応 3 年 (1867) 10 月に大政奉還、同 12 月に王政復古の発令が下され、5 年にわたる京都守護職を解任されます。

しかし、薩長両藩を主軸とした新政府は、自らの威令を浸透させるためにも、旧幕府を戴く会津藩を潰滅させようと画策します。こうして、会津藩と新政府との戦いの火ぶたが切って落とされました。慶応 4 年 1 月 3 日の鳥羽伏見の戦い・戊辰戦争である。

戊辰戦争に敗れた会津藩は、天皇及び幕府に対する厚い忠誠の念にもかかわらず、「朝敵・逆賊」の汚名を着せられ廃藩となりました。崩壊を余儀なくされた松平家ではありましたが、幸いにも明治 2 年 (1869) 6 月 3 日に、会津若松御薬園にて会津藩主松平容保嗣子慶三郎 (容大) が誕生する。その後、1 年 1 ヶ月余りで家名再興を許され、生後 5 ヶ月の容大公が後を継ぎ、斗南藩 3 万石を立藩する。斗南藩の誕生である。

しかし、容大公は幼令であったため権大参事の山川浩が新藩斗南藩の全責任を負い新領地を治めることになった。会津藩 23 万石からわずか 3 万石に削封された斗南藩人達は、こうして北奥の斗南藩領へ新天地を開く苦難の陸路・海路の移住生活をするようになった。

※ 1 幕府の補佐役、幕府側 ※ 2 幕府を倒すための政治的な運動 ※ 3 京都の治安維持等のための江戸幕府の役職 ※ 4 幕府に反対し外国勢力を追い払う運動 ※ 5 朝廷と幕府の提携で政局の安定を意図した政治運動 ※ 6 政権を朝廷に返上 ※ 7 武家政治を廃止し天皇による君主政治に戻す ※ 8 薩摩藩 (鹿児島県) と長州藩 (山口県) ※ 9 1868 年 (戊辰の年) に始まった倒幕派と旧幕府軍との戦争 ※ 10 あととり、よつぎ



会津藩主 **松平容保** かたもり

尾張徳川家の分家にあたる高須藩 3 万石の松平義建の六男として生まれる。8 代藩主松平容敬に嫡男がいなかったため、12 歳のとき養嗣子として迎えられ、18 歳の若さで 9 代目当主となる。



斗南藩主 **松平容大** かたはる

9 代当主容保の長子で、幼名は慶三郎。明治 2 年 (1869) に家名再興が許されたため、生後わずか 5 ヶ月で松平家 11 代を継ぎ、陸奥国斗南藩主となり、のちに元服し、名を容大と改めた。



斗南藩権大参事 **山川浩**

若い頃から「会津の知謀」として名高く、幼主松平容大を戴いて新生斗南藩の執行職として全責任を担った。数々の困難に対し、皆の先頭に立って活躍した。



陸軍大将 **柴五郎**

会津藩上級藩士の五男として生まれ、明治 3 年 12 歳のときに斗南藩へ移封される。のちに上京し、義和団事件などで活躍。大正 8 年に陸軍大将となる。

写真提供：会津武家屋敷

斗南藩 その苦難の軌跡。



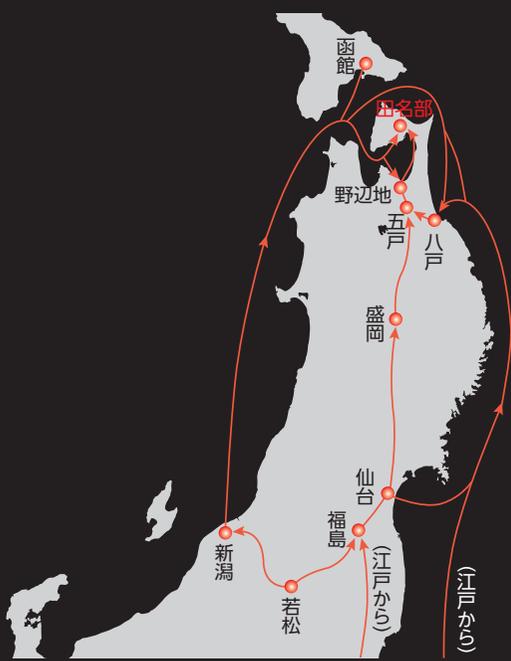
北の地への移住

これは会津人たちの新たな血と涙と苦汁の日々のはじまりでした。

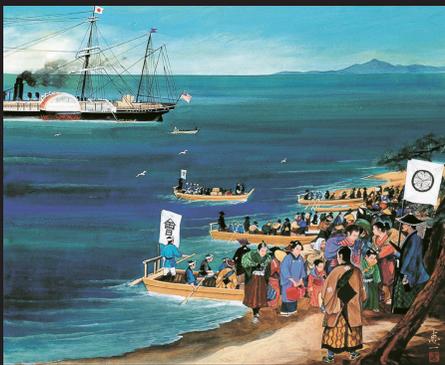
明治三年(1870)春。淡い希望と深い悲壮感を胸に、移住がはじまりました。海路をとった第一陣300人は、品川を出発。以後続々と蒸気船で北上がはじまり、大平や野辺地、八戸

などに入港、そこから入植地の村々へと移っていききました。一方陸路で移転した者たちは、悲惨な旅路であったと言います。宿泊に難色を示す旅籠も多く、また晩秋のことで、みぞれまじりの寒さに死者も多数にのぼり、自殺行為に等しいものでした。

斗南への移住経路



入植先での生活もまた、目を覆うほどきびしいものだったようです。一人一日三合の扶持米は保証されていましたが、国産米に南京米を混ぜた粗悪なものでした。また、流れ着いた海藻を干して棒で叩き、木屑のような粉にして鍋で煮てふやかした「御しめ」と呼ばれる粥で飢えをしのぎました。でんぷんを作ったり、松の木の白皮を食べたり農家の残飯を漁ったりしたと言いますから、飢餓地獄そのものだったようです。冬に入ると餓死や凍死、栄養失調などで死者が続出しました。



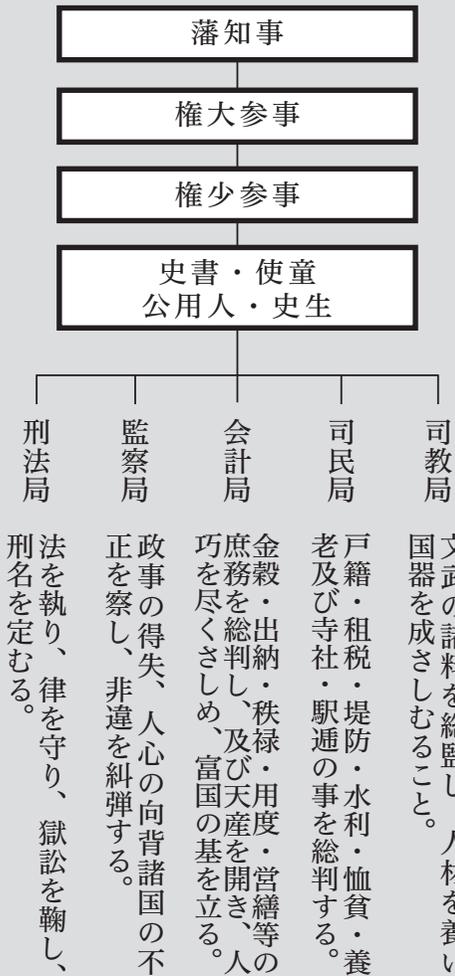
新時代を見据えた施政

およそ、2800戸、17300人余りが移住していますが、藩がまず手がけたのは山川浩を参事にすえ、五つの局を組織しての機構整備でした。また、旧藩時代の家禄や身分制を廃止、特筆すべきは、全国に先駆けての廃刀令や戸籍の作成など、新しい時代をにらんだ施政を行って

います。また、子弟教育も怠らず、藩庁が置かれた円通寺に斗南藩校日新館を開校したほか、領内各地に分校にあたる郷学校を開設しています。さらに、安渡と大平を合併した大湊を東北の長崎と位置づけ、将来日本の開港場とする壮大な構想も視野に入っていました。



斗南藩庁組織図

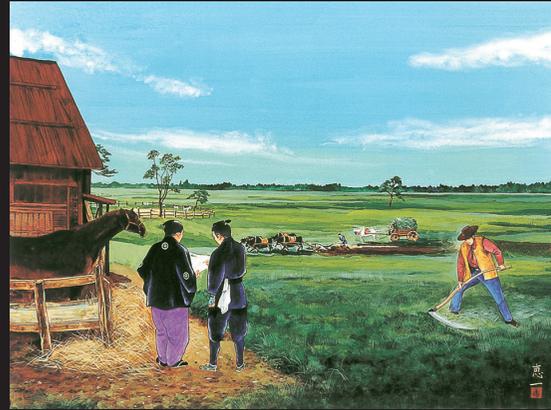


新たな街づくり

街づくりにも着手し、田名部郊外の妙見平と呼ばれる丘陵地帯を開墾し、大平地区には松ヶ丘に30棟の長屋が建てられています。ただ、こうした入植地に移住できたのはほんの一握りで、ほとんどの藩士と家族は、扶持米を頼りに細々と暮らしていました。

産業への取り組み

本格的な農業対策は、明治四年の春、雪解けを待って行われました。開墾と養蚕をすすめる、藍、茶、煙草、甘藷、蜜柑の類まで栽培させ、鋳物の鑄造、瓦、煉瓦の製造、漆器細工、製紙、機織、畳などの手工業も奨励しています。



失敗に終わった作物、産物もありましたが、茶や甘藷は相当の出来栄であったといわれています。先住の百姓でさえ手を焼くやせた土地での苦労は並大抵のものではなかったでしょう。

度重なる苦難

明治四年七月、廃藩置県が行われます。九月には斗南、七戸、八戸、黒石、館の五県が弘前県に合併されてしまいい、翌年には政府の援助も打ち切られ、さらにどん底の生活を強いられることになりました。そして、生活の破綻と時

斗南藩士が残したものの

斗南藩の治世はわずか一年余りに過ぎませんでした。会津人の先見の明と、一徹なまでの姿勢は、物心両面においてむつ市をはじめとするこの地方に残した功績は実に大きなものがあります。

代の移り変わりに翻弄され、多くの藩士が斗南を去りました。明治六年には扶持米の打ち切りと転業資金の交付があったため藩士の転出に拍車がかかり、この地に残ったのはおよそ五〇戸に過ぎませんでした。

斗南藩領有地



もっと斗南藩

① 三沢市先人記念館

日本初の民間洋式牧場を開設した斗南藩少参事であった廣澤安任をはじめ、地域の発展に尽力した人々を顕彰する記念館。

【場 所】三沢市谷地頭 4-298-652

【問い合わせ】0176-59-3009

② 白虎隊供養碑

観福寺境内にある悲運を遂げた白虎隊士の供養碑で、会津飯盛山の供養塔よりも古い明治4年の建立で、日本最古のもの。

【場 所】三戸郡三戸町大字同心町字熊の林 6-2

【問い合わせ】0179-22-2272

③ 杉原 凱の墓

旧会津藩士で、藩校日新館の学館長を務めた杉原凱の墓。杉原は、明治4年に三戸に移り、この地で病没したが、師と仰ぐ門人達によって三戸大神宮境内に建立された。

【場 所】三戸郡三戸町大字同心町字諏訪内 43

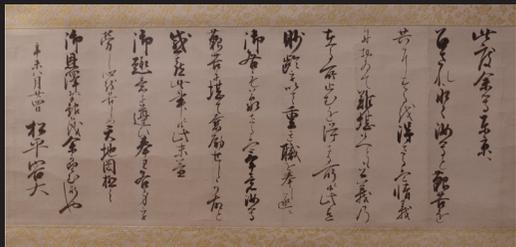
【問い合わせ】0179-22-2501

斗南の由来

一説には、中国の詩文の中にある「北斗以南皆帝州」からとつたと言われています。北の辺境に流されてきたが、ここも天皇の国に変わりはなく、共に北斗七星を仰ぐ民であるというような意味ですが、望郷の思いと、いつかは南に帰りたいという願いが秘められていたのかも知れません。

もう一つの説は、「南斗六星」を語源とするものです。これは北斗七星に対してつけられた呼称であり、射手座の中央部を指します。この星座をよく見ると、射手が永久に放たれることのない矢を隣のさそりにむけているようです。もちろんさそりは薩長藩閥政府を、射手は会津藩を象徴しており、当時の会津人の心境がぴったりと重なり合います。

容大公と容保公



松平容大書翰 向陽處 蔵（大間町）

明治2年6月に、会津若松の御薬園で誕生した斗南藩主松平容大公は、幼くして斗南藩知事に任ぜられました。明治3年9月2日の出発儀式後、籠におさまり午前猪苗代を出発し、21日間かけて9月22日、当初藩庁が置かれた五戸へ到着、仮寓し、田名部へ藩庁を移したことに伴い、明治4年2月18日に田名部の地に入りました。藩庁の仮館となった円通寺では、政務を行い、徳玄寺を食事や遊興の場としていました。

藩知事とはいえ、年端もゆかない幼君であり、実際の政務は山川権大参事をはじめとする家臣達によるものでありましたが、陽春を迎える頃には家臣達の差配により、移住者達の激励、志気高揚のため、下北半島内の領内巡行に出向いています。

容保公は家名再興後も謹慎の身でしたが、明治4年3月14日には斗南藩へ預替えとなり、養子の喜徳とともに、東京から函館、佐井を経由し同年7月20日、円通寺に到着しました。円通寺では、幼い容大公が父である容保公を出迎え、多くの家臣達が感涙にむせんだといいます。容保公と容大公にとっては、これが親子の初対面であったといわれ、二人は、喜徳とともに約1ヶ月の間、親子水入らずの日々を過ごしましたが、政府からの上京命令により、同年8月25日、斗南を後にしています。

この地を去るにあたり、容保公は、容大公の御名で布告（松平容大公書翰）を出しています。大意としては「このたび東京へ召喚され、皆と苦勞をともにできないのは耐え難いが、公儀の思し召しでありやむを得ない。これまで幼齡でありながら重職を奉じおとがめも受けなかったことは、皆が苦難に堪え、奮励したおかげだと喜んでいる。この先も益々（天皇の）御趣意に遵って、身を削り、心を配して、（天皇の）限りない恩に報いることが私の望みである」という内容になっていますが、幕末から長年にわたる藩士の艱難辛苦の責を詫げる思いと、天皇を仰ぐ忠実な臣民であるとの訴えが読みとれます。

釜臥山と斗南藩

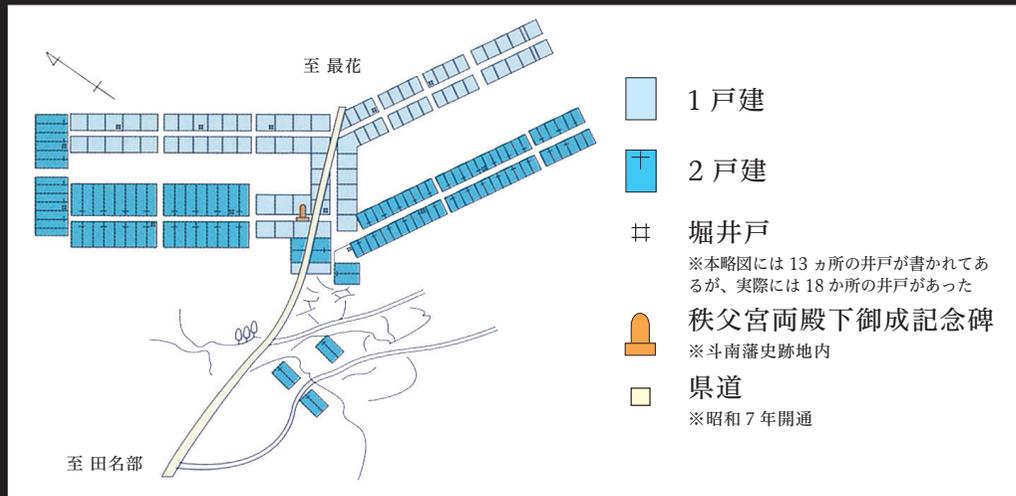


釜臥山

会津人は、誰が言うまでもなく、陸奥湾を猪苗代湖に、釜臥山を故郷会津の磐梯山に見立て、斗南磐梯とよんで墳墓の地を偲びました。船上から、陸路からだんだん見えるこの景色に励まされて藩士・家族達は、新たな希望に奮い立ったのではないのでしょうか。明治3年に先発の藩士達がはじめて田名部に到着した際には、住民達が軒先に提灯を吊し、敬意を表して迎えたといわれ、感慨ひとしおであったことでしょう。

斗南藩が市街地を建設したのは、田名部川の流域に開けた平野をさき田名部の町に相對した妙見平と呼ばれる丘陵地帯でした。領内の開拓拠点となることを夢見たこの開墾適地は、藩名をとって「斗南ヶ丘」と名づけられました。市街地は1戸建約30棟・2戸建約80棟からなり、東西に大門を建築して門内の乗打ちを禁止し、18ヶ所の堀井戸をつくりました。また、一番町から六番町までの大通りによって屋敷割りされ、1屋敷を百坪単位として土堀を巡らせて区画しました。

斗南ヶ丘市街建設計画図



斗南藩のまちづくり

斗南藩史略年譜

年代	西暦	事 跡
明治		
元	1868	会津藩主松平容保、若松城開城降伏。
2	1869	容保の長男・容大誕生。 新政府、当時生後5ヶ月の容大に特旨を以て家名を再興させ、3万石を下賜。
3	1870	藩名を「斗南」と決定。 旧会津藩士とその家族、新天地斗南へ移住。 田名部郊外妙見平を斗南ヶ丘と改め、新市街地の建設を図る。
4	1871	容大公、田名部に到着。 廃藩置県が行われ、斗南県と改称。 容保公、田名部に到着。 容保・容大の両公が東京へ帰還。 斗南、七戸、八戸、黒石、館の五県を弘前県に合県。

姉妹都市

福島県会津若松市

昭和59年9月23日締結



戊辰戦争の敗北によって、この地に移封された会津藩士とその家族達。その子孫が多いことから、かつての城下町として名高い会津若松市との新たな交流が持たれています。
写真提供・会津若松市



むつ市
MUTSU CITY

〒035-8686

青森県むつ市中央一丁目8番1号

むつ市経済部観光戦略課

TEL 0175-22-1111 (代表)

発行 / 平成27年5月

平成30年5月一部改訂

令和2年4月一部改訂

令和4年8月一部改訂

発行者

むつ市会津若松市姉妹都市推進連絡協議会